

平成30年6月3日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03032

研究課題名(和文)シベリア地方主義と民族学との相関的作用に関する研究：歴史人類学と思想史との融合

研究課題名(英文) A Study on the Interrelation of Siberian Regionalism and Ethnography: A Possible Cohesion of Historical Anthropology and Intellectual History

研究代表者

渡邊 日日 (Watanabe, Hibi)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60345064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：1860年代に本格的な産声をあげ、1920年代に自然解消していったシベリア地方主義について、その思想と運動の全体像を、ロシア語一次資料を中心に用いて理解する視座を得た。ロシア各地で文献調査を行い、また北海道大学附属図書館では主に二次文献の資料収集を行い、本課題に関する基礎的文献の収集を完了した。特に地方主義の代表的な5名の著述家(スロフツォフ、シチャーポフ、ポターニン、シャシコフ、ヤードリンツェフ)の著作に見られるシベリア観・ロシア観を分析し、そこに通底している論理展開の特徴(シベリアを独自の地域とみなすにあたって利用できたり、失ったりした論理的資源の布置)を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I used mainly the primary Russian sources on Siberian Regionalism (sibirskoe oblastnichestvo), an intellectual and social movement which arose in the early 1860s and faded away in the 1920s, to acquire the viewpoint for the integrative interpretation. I conducted my own material and archival researches around Russia and collected the second sources at The Library of Hokkaido University. I investigated how prominent activists of Siberian Regionalism (Slovstov, Shchapov, Potanin, Shashkov, Iadrintsev) looked at Imperial Russia and Siberia in/outside Russia, and made clear the particularities of their discursive logic on which they articulated Siberia as a distinctive unit.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 民族学 思想史 シベリア ロシア シチャーポフ ポターニン ヤードリンツェフ

1. 研究開始当初の背景

英米系文化社会人類学(以下、人類学と略す)では、機能主義や構造主義への反発で歴史性・動態性に関心が高まり、またポスト植民地主義的自己批判の流れで歴史に「覚醒」する経緯があった。だが昨今、当時は声高になされていた、人類学的知識の歴史的自省は忘却されているように見える。人類学が持つ文化・社会批判の力を今一度落ち着いて再考する必要があるが、その一つの方法として、主に思想史で扱われている思想運動を、人類学史との相関関係のもとで捉えるということがあって良いだろう。

渡邊は大学院修士課程以来一貫してシベリアを研究対象としてきた。長期の民族誌的フィールドワークに基づく研究は、『社会の探究としての民族誌：ポスト・ソヴィエト社会主義期南シベリア、セレンガ・プリヤート人に於ける集団範疇と民族的知識の記述と解析、準拠概念に向けての試論』(東京：三元社、2010)に結実し、一定の段階を終えた。シベリアは上記の課題を遂行するにあたってまさに「うってつけ」の地域である。というのも、シベリア民族学の発展は、帝政ロシアに批判的な学者・知識人がシベリアに政治犯として流刑された経緯と密接に関係していたからである(シベリア流刑の経験のない革命家を探すのは困難であろう)。

特に、その大部分が民族学者・歴史家であったシベリア地方主義(以下、地方主義と略す)は、ロシア・ナロードニキ主義、アナキズムと深い関わりがあるなかで形成され、後にマルクス主義、ポリシェヴィキ主義と対峙することになるが、その主義思潮の大切な背景の一つに、シベリアの先住民(当時の行政会範疇で言えば「異族人」)への注目があがり、シベリア民族学の発展と軸を同じくしていたのであった。

2. 研究の目的

本研究は以下の点を目的とした。

(1) 地方主義に関する文献資料の収集。19世紀後半ロシアの知識人は概して多作であり、著作量は膨大であるが、地方主義者も例にもれない。地方主義に関する英語・ドイツ語文献の収集はおおよそ本研究期間前に終えていたので、ロシア語の一次資料・二次文献を可能な限り統合的、網羅的に収集する。また、地方主義に関する研究は最近急速に盛んになり、数々の一次資料が再版されたり、再編集されたりしてアクセスしやすくなった。だがそれでも、未公刊文書(特に、地方主義運動の重要な本拠地トムスクでの未公刊文書)の調査は不可欠であろう。

(2) 上記で得られた一次資料を読解する(その方法については後述する)。その過程で、先行研究(S. D. Watrous, W. Faust, D. S. von Mohrenschildt, 田中克彦、S. Stuch)の建設的

批判を行う。

(3) 研究成果を、日本語のモノグラフ一冊および英語論文・ロシア語論文1本ずつ公表する。また、近年はインターネット上で歴史資料・文献(定期刊行物など)が公開されることが多いが、本研究課題に関して言えば、サイトの運用主体が散在していて全体を見通すのが極めて困難な状態になっている。それゆえ、特別にサイトを立ち上げ、地方主義のインターネット上における研究文献目録を作成・公開し、研究環境の改善を図る。

3. 研究の方法

以前の予備的研究(渡邊「帝国の文化が、批判の表象か：帝政期シベリアに於ける『民族誌的多様性』について」『超域文化科学紀要』、8：5～44、2003)を踏まえ、三つの視座から本研究へアプローチすることが計画された。

(1) 一つは、地方主義者(多くの者が参加したが、本研究では集中的に取り扱う人物として5名、スロフトフ、シチャーポフ、ポターニン、シャシコフ、ヤードリンツェフを選出)の地方主義上のテキストを読み、どうという論理でシベリアを独自の、一般的なロシアの地域や周辺とは異なる独特の単位へと弁別していったのかを探る方法である。従来の研究史のほとんどは、地方主義の事件史的研究、すなわち、いつ誰がどこで何を誰とともに何の目的で行ったかに関する実証的研究であった。この分野では、ロシア科学アカデミー・シベリア支部・歴史学研究所およびノヴォシビルスク大学教授のM・シロヴスキイ(Шиловский)の研究が現在、最高峰と言える(広範に未公刊資料を駆使し、地方主義の様々な側面について調査し、2007年の段階で総計326本/冊の論考を公表している[G. A. Ноздрин, ред., *Шиловский Михаил Викторович: библиографический указатель*, Новосибирск: Сова, 2007])。事件史の領域では、今後、想定外の文書が大量に発見され、従来の見解のほとんどが用済みになるということでも生じない限り、シロヴスキイの独走状態は揺らがないだろう。シロヴスキイが手を付けていない領域が、地方主義者のテキストの解読である。ここで想定しているのは、事件史の客観的証拠としてテキストを引用する視座ではなく、そのテキストに表れている論理展開を追い、彼らに特徴的な思考方法を析出する、という視座である。これはすぐれた思想史的研究に特徴的な手法であるが、最近幾つかの例外はあるにせよ(A・ザイヌトディノフ[Зайнутдинов]の論文「ヤードリンツェフの社会学的見解」[2011]など)、地方主義研究で十分に使用された手法ではなかった(Mohrenschildtのモノグラフ[1981]にしても地方主義を一部とするロシア連邦思想史の通史的研究であり、記述はそう深いものではない)。

(2) もう一つは、彼らの民族誌的・ドキュメンタリー的著作を解説し、叙述上どういう特徴が見られるのかを読み取る方法である。地方主義の研究者のほとんどは、政治・社会思想史および社会運動の関心から地方主義のテキストに接近するゆえ、それ以外のテキストについて論じることがあまりに少ない。例えば、地方主義運動の当事者による総括的な論文、ポターニンの「シベリアにおける地方主義的傾向」(1907年)は必読の対象となっても、専門的なフィールドワークの結果である民族誌『西北蒙古誌』(1881-1884年)が同様の扱いを受けているとは到底言えない。地方主義を代表する一冊であるのは間違いないヤードリンツェフの『植民地としてのシベリア』(1882年)と比べ、ドキュメンタリー的民族誌とも評せる『監獄・流刑地におけるロシア人コミュニティ』(1872年)の被引用度は(大雑把な目算ではあるが)かなり低い。だがこれは奇妙ではある。地方主義者のほとんどは民族学者でもあったのであり、特にこの二人はそうである。となると、地方主義者の政治的・社会思想史的著作と民族誌的・ドキュメンタリー的著作の間に、何らかの論理的回路が通っているのではないかという仮説が導かれよう(もし回路がなければ、ではなぜ両者の思考は互いに分離したままであったのか、が重要な問いとなつてこよう)。

(3) 三つ目は、地方主義者の論点形成(フレーミング)の特徴を探る。シベリアの問題を訴え、論陣を張るといっても、それだけに活動を集中させていたというのは考えにくい。言うまでもなく19世紀ロシアは数々の出来事を経験し、特に農奴解放の「改革後」は社会問題が一挙に言説空間で爆発した感がある。そのなかで地方主義者は、様々なロシアの社会・文化的問題を論じつつ、同時にそれらと関連づけながらシベリアの問題を論じたはずである。実際、ヤードリンツェフは同時代のロシア文学を、シャシコフは「女性問題(Женский вопрос)」を多く論じていた。

4. 研究成果

第一年目(2015年度)では、病気(二回の入院、および手術)ゆえ進捗状況に遅れを見たが、文献収集を北海道大学附属図書館で行った。シチャーポフの一次資料のほとんど全て、および二次文献(近年の代表的な研究者A・マドジャロフ[Маджаров]のモノグラフ[2005]のモノグラフなど)、地方主義の研究文献目録(C. C. Выкова, ред., *Сибирское областничество: библиографический справочник*, Томск: Володей, 2001)を入手できたのは大きな収穫であった。特に、この研究文献目録は、漏れや誤植が少なくなく、また今や古いものになっているのは確かにしても、総勢12名の地方主義者の著作とそれ

に関する言及文献が一覧できるゆえ、手元になければ作業効率は低かったままだつたろう。

読解作業においては、地方主義と帝政期シベリア民族学に関するロシア語以外の文献を読解し、論点を整理した。本研究科題に関する英語・ドイツ語の文献は収集を終えた。英語圏では、E・サイドのオリエンタリズム的問題設定の帝政ロシアへの適用可否が論争の種となったが、対象を切り取り、記述するという営為は、民族学や歴史学の具体的実践に編み込まれており、そうしたレベルの実践とマクロな「言説編成」との双方を見る必要があるとの理解を得た。ドイツ語文献で言えば、Stuchの博士論文 *Regionalismus in Sibirien im frühen 20. Jahrhundert* (20世紀初頭のシベリアにおける地方主義)を入手、読解した。これで、ドイツ語圏では、Faustの著作とこれを通読すれば地方主義に関してかなり深い理解が得られること、ドイツにおける精神史的研究の伝統が存続していること(言い換えれば、民族学的知識の流れとは無関係なままであること)が確認できた。

20世紀後半から現在にかけての英語圏における、旧社会主義圏(ソヴィエト連邦・東欧)の民族誌的研究を概観した論考を英語で、また2000年代以降の「時代」に関しての主要論点を批判的に概観した日本語の論考を発表し、思想史研究と接続する民族学史の研究の必要性を改めて痛感した。

第二年目(2016年度)では、引き続きロシア語一次文献の収集に努めた。ロシアへの海外出張を行い、各都市(モスクワ、オムスク、ノヴォシビルスク、トムスク)で現地の研究者と交流しつつ、日本では入手が困難な文献を集めることが出来た。ノヴォシビルスクではシロヴスキ教授と会い、最新の研究状況に関して知見を得た。トムスクでは、トムスク大学図書館の「手稿・書籍記念物係[ОРКП: Отделение рукописей и книжных памятников]」にて、ポターニンへの地方主義者(ヤードリンツェフ、クレメンツ、コジミン、セレブレンニコフ)の手紙を、トムスク州国立文書館(ГАТО: Государственный архив Томской области)にて、ファイルP-72(シベリア地方ドゥーマ関連)の文書群を精査することが出来た。また、オムスクとトムスクでは、(モスクワやペテルブルグでは購入が難しい)現地で出版されている研究書を購入できた。

読解作業について言えば、ポターニンやヤードリンツェフの主要作品と平行してスロフツォフの『シベリア歴史概観』の解説を行った。誤りが散見され、またイェルマーク以前にシベリアの歴史を認めていないなどすでに指摘されている欠点がありながらも、また不必要と評してもよい修辭的文体に辟易させられるところがありながらも、後の地方主義の本格的誕生を決定づける主張の存在を確認できた。と同時に、シベリアという独

自の単位の主体たる「私たち」には先住民は含まれておらず、先住民は「自己を忘却」している、というヘーゲルの歴史観をスロフツォフが有していたことの意味合いについて考察を加えた。地方主義とシベリア先住民問題との関連は、想定以上に入り組んだものである。

シベリアを概観する通史的論考を発表し、地方主義のアクチュアリティを逆照射することを試みた。

最終年度の第三年目(2017年度)では、これまでと引き続き資料収集を行った。北海道大学附属図書館では、カザフスタンで出版されたポターニン著作集(全3巻本)を閲覧できた。校閲の不確かさなど問題がないわけではない論集だが、カザフスタンでポターニンがどういう視角で評価されるのかが分かる点で有益であった。資料収集の意味でさらに進捗を得たのは、『植民地としてのシベリア』の日本語訳を入手できたことである。太平洋戦争中、邦訳がなされたということは耳にしていたが、千葉大学に草稿が保管されていることが判明し、接することが出来た。訳者は、1943年にI・シチェグロフ(Щеглов)の『シベリア年代史』を訳出・出版した吉村柳里氏である。第二版を元に、ほぼ完全な形で全訳されている。いずれ、何かの形で世に出せればと思う。

研究の総括としては近い将来に一冊のモノグラフを構想している。シベリア地方主義の誕生から解体までの60年を、民族学の軌跡や革命思想の展開と関連づけながらその全体像を描くことになる。最も近い段階で刊行される研究成果は、「シベリア地方主義と『女性問題』: シャシコフをめぐる」(仮題)と題した論文である。1850年代、帝政ロシアの言説空間で開花し、ロシアにおける女性解放運動の源流となった「女性問題」論で、従来の研究では重視されていないが、重要な役割を果たしたのが地方主義者のシャシコフであった。彼の立論において、ロシアとシベリアとの関係の矛盾が地方主義者によって指摘されつつも解消されず、言説上の限界の突破が不可能であること、言い換えれば、シベリアを歴史的にも文化的にも称揚しなければならないという地方主義運動の論理的必然と、問題としてシベリアが現に存在しているという状況の悲惨さが存在しているという事実および地方主義の現実的立脚点との矛盾が、そう容易くは言説展開上、解消できないという特徴を明らかにした。また、小論であるが、シベリア先住民にとってのロシア革命の意義を考察・発表し、逆に地方主義が結果的になしえなかったことを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

渡邊日日「シベリア先住民にとってのロシア革命」『月刊みんぱく』12月号、5頁、2017年、査読無。

Hibi Y. WATANABE, “Reflections on the Current Situations of the Cultural Anthropology of Post-Socialism: Concerning the Japanese and English Monographs,” (*The Proceedings of the 30th International Abashiri Symposium*, pp. 15-22, 2016)、査読無。

〔学会発表〕(計1件)

渡邊日日「シベリア地方主義の研究状況: 2016年度調査報告」日本シベリア学会、11月20日、千葉: 千葉大学、2016年。

〔図書〕(計3件)

渡邊日日「シベリア地方主義と『女性問題』: シャシコフをめぐる」(永山ゆかり・吉田睦編『アジア遊学(アジアとしてのシベリア: ロシアの中のシベリア先住民世界)』[仮題]東京: 勉誠出版、2018年刊行予定)。

渡邊日日・佐々木史郎「ポスト社会主義以後という状況と人類学的視座」(佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界: 比較民族誌的研究』東京: 風響社、9~43頁、2016年)。

渡邊日日「シベリア: シベリア開発とその課題」(塩川伸明・池田嘉郎編『東大塾 社会人のための現代ロシア講義』東京: 東京大学出版会、139~168頁、2016年)。

〔その他〕

ホームページ
(現在作成中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 日日 (Watanabe, Hibi)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号: 60345064